

昭和二十年の雑誌を読む

斎藤佐知子

戦後七十年を迎える今年、改めて昭和二十年（1945年）当時のような雑誌が発行されていたかを知りたいと思い、まずは短歌、俳句、文芸雑誌、国文学関係の雑誌を探した。現在、実際に手に取って確認できる範囲のものから抜き出したので、取りこぼした雑誌もあるかと思うが、それはまた次の機会に補充していきたい。

取り上げた雑誌のタイトルは十六誌と、他に特例として一誌である。紙不足のため、幾つかの結社誌が統合を余儀なくされた後、かろうじて生き残った雑誌である。

敗戦に到るまでの雑誌には、戦死者についての記事が見られなかった。軍隊内での昇進、あるいは入営の消息の、武運長久を祈るとの記事はあるが、当然多くあったはずの戦死した会員を悼むという項を見つけないことができなかった。私の怠慢であろうか。あるいはそのような事例は無かったの

か。例えば「鶯」（その後「心の花」に統合）の昭和十九年には、宇野栄三氏の戦死の追悼記事が載っているが、それ以後は、「心の花」二十年、石樽正氏の戦災死の追悼記事のみである。言論統制の影響であるうか、誌面からは分からなかった。

雑誌を発行するためには、まず紙がなければならぬ。その紙が配給制となり、一冊のページ数は、おおよそ二十から四十几ページ、文芸誌で五十から六十ページである。四月には配給制も中止となり、四月号以降発行された雑誌は少ない。

誌面が少ない中で、掲載される作品も限られ、論争の類いを掲載する余裕は無かつたであろう。それでもなお雑誌を存続させようとする各編集者の執念と困難は想像するにあまりある。現在の「心の花」誌は毎号平均百ページに近い。簡単に比較できるものではないがまさに隔世の感がある。

敗戦となった八月以降については、十月号あたりから復刊、再刊が徐々に始まっており、大きな社会変動を、どこか戸惑いつつも歓迎している様子が見える。紙不足は相変わらず続いており、例えば「ホトトギス」の十一月号は十六ページである。

ここで、紙不足以外の理由で廃刊となった例を、特例として、「改造」の二十一年一月号の序文から紹介しておきたい。

『復刊の言葉』 我社は昭和十九年六月東条内閣の為に毒殺閉鎖されて今日に至った。「改造」は創刊以来、いくたの圧迫を乗り越えて世界文運の先駆者としての役割を遂げ我国の未来に幾多の貢献をなすべく努力して来たに拘わらず東条内閣は当時の戦争段階に我社及び「改造」の存在を有害なりと断じ、所謂横浜事件なるものをデッチ上げ司法上の判決をも俟たずして中央公論社と共に閉鎖せしめ